



Japanese Battle Ship "Kawachi"

内河艦戰國帝



～ふるさと探訪～

一 弩級戦艦 一 「河内」



今から89年前に徳山湾でおこった悲劇をご存知でしょうか？

1918年(大正7年)7月12日、戦艦「河内(かわち)」の乗組員621人の尊い命が奪われた悲しい出来事がありました。

大津島の回天記念館、周防大島町の陸奥記念館などは知られていますが、語り継ぎたい歴史がここにもありますのでご紹介します。

戦艦「河内」

「河内」は、第1次世界大戦前の1912年に日本海軍が竣工させた弩級(どきゅう)戦艦です。それまではヨーロッパなどから輸入していましたが、日本の技術力の向上により設計・建造された世界でも群を抜く性能の国産初の大型戦艦でした。

「弩級」とは、大型で巨砲を持つことが戦艦の戦力として競い合われる中、当時の世界最大砲12インチ砲を装備した1906年のイギリス最新鋭大型戦艦「ドレッドノート号」の性能を持つ戦艦のことであり、「ド級」と呼ばれ、漢字をあてて「弩級」と表されました。

「河内」は、排水量20,800トン、全長152.4m、全幅25.7mという大きな艦体に、新設計の50口径(30.5cm)の主砲や副砲などドレッドノート号の性能を上回る多くの装備を搭載していました。

しかし、この最新鋭の軍艦が、わずか6年で沈没してしまったのです。それ以前にも、日露戦争後の1905年(明治38年)から1917年(大正6年)までの12年間に、7隻も軍艦の爆発事故が発生しており、それに続く「河内」の爆沈事故は、日本海軍にとって大きなショックとなりました。

「河内」の惨劇

その事故は、夏の夕刻に起こりました。時は、第1次世界大戦終わりの頃です。国内は、平時でした。戦艦「河内」は、訓練の途中で、前日からの荒天を避けるために、他の艦艇と共に徳山湾に停泊中でした。

各艦艇では、夕食の準備に追われていた時刻の午後3時57分、突然右舷前部主砲塔付近で2回の爆発が起こり、大音響と同時に砲塔周辺部や煙突から大火災が発生し、周辺には無数の鉄片が飛散し、火柱と黒煙の渦が天空を覆いました。

巨艦は急速に右舷側に傾斜し、大爆発後4分という速さで転覆し、艦底の一部を海面に現しました。瞬時の出来事で、多数の人が中に閉じ込められ、辺り一面が血の海と化していきました。

乗員1,020名の将兵のうち、621名が殉死となる大惨事となったのです。

最新鋭軍艦の爆沈原因を探るため、徹底的な調査が行われ、家族や親族、交友関係まで

巻き込むものでしたが、確証が得られず原因不明のまま謎の事故として終わりました。

この大きな犠牲を契機に、海軍では危機管理を徹底する方針を打ち出しました。その結果、1943年(昭和18年)の戦艦陸奥爆沈までの25年間、事故はありませんでした。



—大華山から眺める仙島—

海底の泥にはまり込んだ鉄柱などの残骸は、今も海に残っています。

住民の協力

暑い季節の救助作業や船の解体作業も大変な苦勞でした。厚い鉄板をたたきながら艦内の生存者を探し、溶接作業を行いました。また、殉職将兵の搜索や収容は困難を極め、遺体の損傷もひどいものでした。湾岸の住民らが献身的に協力し、連日仙島の海岸で火葬を行い、空に上る煙に多くの人が手を合わせました。

戦艦河内の研究に携わって40年以上になる田中賢一さん(徳山地方郷土史研究会)は、大津島出身で、当時の出来事を物語る歌を父母からよく聞いていたそうです。

遺体の収容に協力した大津島の人たちは、その時、船上から潜水者にパイプで酸素を送る重いポンプを押す仕事に従事し、その人たちの間で歌われていたのが、「軍艦河内引き揚げポンプつき歌」です。1日中作業をする中で自然発生的に生まれ、節もヨイショー、ヨイショとポンプを押すのに合わせて作られたものだと考えられます。この歌は、歌詞を覚えていた田中さんのお母さんから聞き取り、研究を進めている田中さんと小川宣さんにより再現されました。

また、お母さんは「噫(ああ)！河内艦」という歌の1番2番も当時よく歌われていたそうです。年月を経た昭和63年に、この歌詞と楽譜が発掘され、10番にもなるこの歌をテープに収録し再現されました。今から20年前の出来事です。

慰霊祭

地域住民の犠牲者を偲ぶ気持ちは、事故後も変わりませんでした。翌年の1周忌に富田町長が発起人となり官民上げて仙島干渡に慰霊碑が建立されました。慰霊碑のある黒髪島と仙島との砂州(干渡)は、遺体の処理が行われた場所でした。10m近い高さの慰霊碑の奥に茶毘に付した納骨堂があります。

この場所は、船着場がなく海が荒れると降りることができません。今年の90回忌は、天候が悪く真福寺において法要が営まれましたが、地元の仏教団が中心となって戦後から毎年海を渡り法要を行っています。仙島には、福川の高州漁港から船で行くため、一般市民は容易に参加することが難しく、毎年30~40人の参加者で行われます。70回忌には海上自衛隊も参列し、海上慰霊祭が行われました。



参加した人だけで語り継ぐことが難しいと共に、顕彰会や保存会もなく、あまり知られていない出来事ですが、今も新南陽仏教団が熱心に取り組んでおり、田中さんも側面的に支援を行っています。田中さんは、「今年は90回忌の催しが行われ、来年は爆沈90周年として多くの市民の参加を促したい気持ちです。」と話されていました。

【取材協力・写真提供:徳山地方郷土史研究会 田中賢一】